

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

News Letter

第14号

2013年1月15日発行



写真：健康教育に参加しながら妹をあやす少女



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



JICA 草の根技術協力事業の採択内定を受けた マラウイ栄養改善プロジェクト

聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH 理事 **浦部 大策**

この度、JICA（独立行政法人国際協力機構）草の根技術協力事業に応募し、我々ISAPHの企画したマラウイ共和国での3年間約5,000万円の栄養改善プロジェクトが採択内定となりました。アフリカという地での聖マリア病院とISAPHの合同プロジェクトです。その概要について簡単にご紹介させていただきます。

マラウイはアフリカ大陸の南部に位置する南北に細長い国で、人口は約1,000万人。特に目立った資源はなく、産業も発達していないため、世界でも最貧国の一つに留まっています。アフリカの多くの地域の例に漏れず、マラリアやエイズ、結核など多くの感染症が流行しています。また、乳児の栄養不良の問題も大きく、5歳未満の幼児の半数が発育不良や発育停止状態にあり、それが様々な感染症の背景にもなっています。結局、貧困、感染症、栄養不良という要素が混じりあって、乳幼児死亡率などの保健指標は厳しいものになっています。

この3つの要素のうち、栄養不良について問題発生

の状況を年齢別に見ると、乳児から幼児へ、生後6カ月から2歳に至る食事内容が母乳から離乳食、固形食に移行していく時期に急激に問題が大きくなっています。このことは、現行の乳幼児の食事習慣に問題があり、バランスの取れた栄養摂取ができていないことを示唆するものと考えられます。そこでISAPHは、乳幼児の食事習慣への介入や栄養教育によりこの年齢の乳児の栄養摂取バランスを改善し、その結果栄養不良の改善を図ることを目的とした栄養改善プロジェクトを企画しました。

ISAPHの設立母体である聖マリア病院はこれまで、1990年代のJICA公衆衛生プロジェクトやそれに引き続き保健医療の開発調査に関わってきましたし、また、当院職員の浄財を使ってムジンゲ村でのヘルスセンター建設にも協力してきました。その経験を、マラウイの子どもたちの健康改善に繋げていければ幸いです。皆様のご支援をお願い致します。

乳幼児の成長をお手伝いする マラウイ・プロジェクトの準備

聖マリア病院国際事業部 **山崎 裕章**

ISAPH・聖マリア病院では、JICA 草の根技術協力事業からの支援を受け、マラウイ共和国ムジンバ県内で乳幼児の成長をお手伝いする「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」を始めます。このプロジェクト開始の準備として、マラウイ共和国でNGOとして活動するためのNGO登録とプロジェクト支援地域の追加調査を行っています。

NGOの登録は、マラウイ到着1週間後に大統領府(OPC)に申請し、承認書の発行を依頼しました。発行までには2～3週間必要とのことから、2週間が過ぎたころに電話を入れるが全く通じず、またメールを送っても返信がない状況でした。3週間目にOPCの担当者の事務室を訪ね、海外出張中だということが判明しました。しかし、いつ戻るか誰も知らず、また申請の件を他の職員に聞いても誰一人知る人がいない状況でした。このような状況をNGO登録機関であるCONGOMAと活動を承認するNGO委員会に相談し



保健センターでの5歳未満児の体重測定

たところ「OPCはいつになるか分からないから、保健省から別途承認のレターを取っておいてくれ」と言われ、慌ててこの要請のレターを作成し保健省に提出



村での情報収集

しました。

こちらは幸いプロジェクトのカウンターパートである Preventive Health Services Department の協力が得られ、1 週間で Principal Secretary（次官）からの署名入り文書を手に入れました。これで OPC からの承認書なしに CONGOMA への登録申請が可能かと思った矢先に CONGOMA から「OPC からの承認書を待ちたい」と言われ、再度 OPC へ連絡するも今度は電話に出てもらえない状況が続いています。1 カ月が経ち未だ承認書が発行されないことに苛立ちを覚えながらも、なかなかスムーズに対応ができないこちらの問題もあり、これらが今の私の最大のストレス要因となっています。

追加調査は、対象地域の 26 村の巡回や 5 歳未満児健診の状況の確認などを行っています。調査では、炎天下の中を 4WD のピックアップで村の中を走り回っています。各村では、村長や村人に挨拶を行い、訪問の目的を伝え、村保健委員会や保健ボランティアの確認、住民登録簿など必要な情報の収集を行っています。

集まってくれた村人の中で、乳児や 1 歳児くらいを連れてきている母親に、「母乳のみを与えていますか」「離乳食は何を与えましたか」などの声をかけています。そして「もし家に卵が 1 個あったら誰が食べ

るの?」と質問もしています。この卵に関しては、多くの母親は自分の子どもを指し、「子ども」と答えるのですが、皆笑って答えるところが「私を満足させるための答え」であることを暗示しています。中には「夫」と答えた年配の女性もいました。これは、「夫」が食べてしまうということのようでした。この回答を実は期待し、質問をしていました。この女性の回答を受け、男性陣（男女が分かれて座る）に向い、「子どもは成長に栄養が必要だからあげて!」と伝えるとこちらも皆笑って「分かった」と回答します。男性の協力を得るためにも、今からいろいろと男性陣ともコミュニケーションを取りながら行っています。

マラウイでは現在、車の燃料不足でなかなか入手できない状況が続いています。首都の多くの給油所では、長い車の列をしばしば目にします。プロジェクトを展開する県は地方であることから、軽油が 4 週間給油所に届けられていませんでした。いろいろな問題に出くわしながらも、それらの対応を楽しんで活動を行っています。

東京女子医科大学における ISAPHの国際協力に関する講義

ISAPH事務局 磯 東一郎

10月31日と11月7日に東京女子医科大学において講義をする機会をいただきました。この講義は、開発途上国の文化、習慣、生活から保健医療について学ぶことを目的に行われており、私は「ラオスという国とISAPHラオスの国際協力活動について」というテーマでお話をしました。今回の参加者は1～2年生7名で、その他に初日はISAPHの活動にもご協力をいただいている国際環境・熱帯医学教室の櫻井先生、2日目は同教室の塚原先生にもご参加いただきました。少人数でしたので学生さんの反応を間近で見ながら質問などを行うことができ、講義の経験の少ない私にとっては幸いでした。

今回はラオスという国を知ってもらいながら開発途上国への認識を高めることと、ISAPHラオスの活動の話を通じ国際協力の理解を深めてもらうことを目的として講義をさせていただきました。欧米諸国とは異なり馴染みのない開発途上国を理解してもらうのは難しいことです。そこで、ラオスを多面的に理解してもらうために、人口、言語、宗教、政体、経済などの通り一遍の説明だけでなく、スライドには写真を多く用い、歴史的な国の成り立ち、宗教を絡めた文化、習慣、生活、食習慣や医療制度を説明し、ある程度全体像を理解してもらった上で、日本の国際協力の説明とISAPHによる保健医療活動を紹介しましたが、逆に詰め込み過ぎた感があり、反省しています。

終了後に学生さんからいただいた講義の感想では、「日本との文化、習慣の違いに驚いた」「住民が病気になっても貧困やアクセスの問題により十分な医療を受けられない厳しい環境を知った」「ラオスという国や国際協力活動については初めて知ることばかりでよい刺激となった」といった初めて聞いたことへの驚き

に加え、ほとんどの方が開発途上国の歴史、伝統、文化などを理解し、尊重し、その上に立脚した援助の重要性を述べており、国際協力の本質的な部分を理解していただけたことは嬉しい限りです。また「医学的に悪い食習慣でも、相手の文化を否定することには十分な配慮が必要だと思う」「その国の歴史や生活、気候などをすべて考慮した上でどのような援助が必要かを選択していかないと意味がない」という鋭い指摘もありました。更に「国際協力は立派で難しいものであると思っていたが、人を思いやる心があれば誰でもできると気がついた。まず自分の身近なことでできる国際協力から始めることが重要だと思う」という国際協力の原点を述べてくれた学生さんもあり、私にとっても良い刺激となった講義でした。

盛り沢山な内容であったため、消化不良をおこしてしまうのではないかと不安を感じていましたが、重要なポイントは理解していただけたようなので当初の目的は達成されたと思います。この講義の機会をくださった東京女子医科大学の関係者の皆様に深謝致します。



スライドを使った講義

アイ

iサイクルより寄付をいただきました



ISAPH 事務局

iサイクルより、平成24年6月～11月までのペットボトルキャップ収益を含む、合計91,708円の寄付をいただきました。ラオスの母子への支援に使わせていただきます。ありがとうございました。

異文化社会への適応について、 群馬大学で講演を実施

ISAPH ラオス ^{はんどう} 梶 清美

平成24年11月2日に行われた第58回群馬大学保健学公開セミナーにおいて、保健学科・保健学研究科の学生、大学院生および教員を対象とし、「異文化理解と異文化適応～ラオスでの母子保健プロジェクトで学んだこと～」というテーマで講演を行いました。

本講演では、ラオスでの青年海外協力隊活動やISAPH母子保健プロジェクト活動の紹介を通して異文化社会で活動するためにはどういったことが必要であるかなどをお話しました。講演終了後の質疑応答では、実際のISAPH活動に関して興味をもたれた方が多く、活発に意見交換をすることができました。今回の講演では多くの方からご意見をいただき、ISAPHが行っ

ている活動を再度振り返るよい機会となりました。皆様からの貴重なご意見を参考とし、ラオスでの母子保健プロジェクトがさらなる成果を出せるよう活動を行っていこうと思います。



群馬大講演の風景

スタディツアー参加者の声

平成24年10月1日～2日に、東邦大学医学部看護学科4年生のスタディツアーの受け入れを致しました。参加者は引率者2名を含む計10名でした。提出していただいた感想文の中から、一部を抜粋してご紹介致します。

食物タブーの問題は伝統・文化・習慣に関わることで、これらを変えていくことは難しく、高齢者や男性に権力のあるこの地域では、母親の問題だけではないことを痛感しました。しかし、実際の母子保健教育時には母親のみならず、高齢者や男性と多くの地域住民が集まってきており、母子保健教育の必要性や認識が住民に広がってきているのだと感じました。

(長谷川 愛)

パネルを使った教育では、開始当初は絵を使っていましたが、なかなか理解につながらないため、実際に村で使われているものを写真に撮ってパネルにすることで住民の理解につながったという話を伺いました。本当のニーズが何かを見極め、どのようにアプローチ

していくかを、文化も育った環境も異なる村人に寄り添って考えておられる姿に感動しました。

(織田 真澄)

単に「～をしてはいけない」と伝えるだけでなく、何故それをしてはいけないのか、その根拠も具体的に分かりやすく説明することが大切であり、その積み重ねが行動変容を促すということを学ぶことができました。

(神野 恵里)

道具は日本のように綺麗なものが揃っているわけではありませんが、必要最低限のもので対応し、職員の方々も個別に沿った相談を行っている様子が見学でき、働く場所は違っても一人ひとりの健康を考える気持ちは変わらないのだと知りました。

(早川 茉莉)



ラオスの学生たちと記念撮影



子どもたちの体重測定をお手伝い



ラオスからの報告

ラオス赴任のご挨拶

ISAPH ラオス 福山 修次

はじめまして、9月20日にISAPHラオス事務所に調整員として赴任しました福山と申します。ラオスでは知名度と実績の高いISAPHの職員として赴任できることを嬉しく思います。ラオスに来たのは初めてになりますが、サモアやバングラデシュでテニスコーチとして活動してきた経験があります。途上国の生活には慣れているつもりですが、気を引き締めて業務に励みたいと思います。

さて、任地であるカムアン県は開発途上の地域で、首都ビエンチャンとの格差を感じます。ISAPHラオス事務所のあるタケク市内の街並みは質素で、歴史を感じさせる古い家々が中心地に並びます。このような街に外国人は我々だけかと思えば、そうでもありません。県保健病院にはフランスの援助も入っており、週末の市内中心地ではフランス人職員の姿を多く見かけます。また、洞窟などの観光スポットもあり、外国人観光客も見かけます。これから医療や観光業を中心とした発展に期待が持てる県でもあります。もちろん、その発展には我々の母子保健プロジェクトも大きく貢献して



福山職員（左）と、ベテラン現地スタッフのモンさん

いけると思っています。

これから皆様には、現地の活動や様々なラオス情報を、ホームページやニュースレターを通じて発信していきたいと思っています。また、これまでISAPHが積み上げてきた実績を継承し、ラオスの母子保健の発展に寄与したいと思っています。今後とも皆様にはご支援をいただけますよう、よろしくお願い致します。簡単ではございますが、赴任のご挨拶とさせていただきます。

ISAPHの活動を見学して

ラオス青年海外協力隊（助産師） 土屋 恵

私は今、首都ビエンチャンにある国立母子保健病院でボランティア活動をしています。配属先は、1日の妊婦健診者数が平均100人、分娩件数も年間4,000件を超えます。しかし、ここを受診する患者さんは全体からみればごく少数で、多くの人は交通の便や経済

的理由で村のヘルスセンターや郡病院を受診するか、あるいは医療サービスを受けることができないでいます。病院で活動していると村の状況を見ることはなく、もっとラオスの現状を知りたいと思い、今回ISAPHの活動を見学させていただきました。

今回見学した村は健康村に認定されているということでしたが、簡素な住居で敷地内に家畜がおり、私が今まで出会った村の中で一番貧しい村という印象でした。集まってきた村人たちの多くは、汚れた服を着ていて、子どもたちは標準よりも小さく痩せている子が多く、自分の任地との格差に衝撃を受けました。ラオスの医療レベルはまだまだ低いですが、その基本的な医療さえ受けることができない現状。これが大多数の国民の姿なのだと実感しました。

モバイル診療、妊婦健診、鉄剤・ビタミン剤の配布、そして健康教育。健康教育では、スタッフが行いやすく、村人が積極的に参加できるよう工夫され、ISAPH職員、保健局・郡病院の職員、村のボランティアが協力し合って、自ら進めていました。日本ではあたり前の「自ら動く」行動も、援助慣れしたラオスではなかなか難しいこと。ラオス人自身がこの活動の成果を実感し、重要性を認識したからこそモチベーションが向上したのだと思います。また、ISAPHの活動は地域のニーズにしっかり密着した活動であり、目に見えるプラスの



パネルシアターによる栄養指導

影響を住民に与え続けているのだと思います。

安全なお産を行うには、妊婦さん自ら健康的な生活を管理できる教育が重要となります。私の配属先では、まだ妊婦さんへの健康教育が十分なされていない状況なので、今回の見学を活かし、妊婦さんのニーズのみならずスタッフが成果を実感できるような健康教育を検討していきたいと考えています。



離乳食のサンプルとしてお粥を配布



フリップチャートを用いて妊婦へ健康教育を行う様子

VHV研修を実施

ISAPHラオス 福山 修次

これまでISAPHが主導で行ってきた健康教育活動も郡保健局の職員が主導で行うところまでできました。そしてこれからは、地域住民主導で行っていききたいというのが国の方針でもあります。そこで、これから重要な役割を担っていくと思われるVHVに、2日間の研修を2カ所で行いました。VHVとはビレッジ・ヘルス・ボランティアのことで、各村でこれまで行われてきた郡保健局を中心としたモバイルクリニックを行う際に、各村で手伝いをしてくれています。今後、彼らが主体的に活動を行えるようになれば、郡保健局の負担が少なくなるばかりでなく、雨季などで道が悪くISAPHや郡保健局が定期活動に行くことができない時期でも定期的に住民に対する教育が行えるようになります。そのために下記の研修を行いました。

- ・保健ボランティアの役割
- ・5歳未満の乳幼児の身体測定法
- ・妊産婦への健康教育（栄養・育児・健診）



体重の測り方を発表するVHV



グループワークの様子

- ・予防接種の重要性とそれによって予防可能な疾患の知識
- ・妊産婦、新生児、乳児死亡、妊産婦死亡の登録方法
午前は郡保健局の職員がレクチャーを行い、午後は4グループに分かれての指導案作成とその発表が行われました。研修は終始なごやかなムードで行われました。VHVからの発言も多く、モチベーションをもった人々が集まっていることを実感できました。

シーブンファン・カシ地区とカンペータイ地区の2つに分かれて行われた今回の研修では、それぞれの地区と村の人々のもつ雰囲気の違いなども見ることが出来て新鮮でした。研修の最終日には修了書も授与されました。初日より自信が深まり、晴れ晴れとした面立ちで去っていくVHVを見て、今後の成果を予想してみるのが我々の楽しみでもあります。すぐに彼らが中心となって健康教育を行うことは難しいかもしれませんが、今後も定期的に研修を行うことや定期活動において少しずつ健康教育を実践させていくことが今後の村の生活水準を上げていくことに役立っていくと思われます。

最近のできごと

2012年8月～11月

- 8月10日 青年海外協力隊員1名活動視察受け入れ
- 9月5日 セバンファイ郡保健局においてラオス母子保健プロジェクト6カ月会議を実施
- 9月7日 プンファナー村タイ集落においてブンファナー村の戸籍管理に関する会議を実施
- 9月14・15日 サワナケット県で開催された第6回ラオス保健フォーラムでISAPHの活動をポスターセッションにより報告
- 10月1日・2日 東邦大学医学部看護学科スタディーツアー受け入れ
- 10月9日～12日 セバンファイ郡保健局とカンペータイ地区においてVHV研修会を開催
- 10月15日 セバンファイ郡シーブンファン地区ブンファナー村において戸籍修理研修会を開催
- 10月27日 聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏をJICA草の根技術協力事業によるISAPH・聖マリア病院合同プロジェクト立上げ準備のためマラウイに派遣
- 10月31日 ISAPH事務局磯が東京女子医科大学で講義
- 11月2日 群馬大学において「異文化理解と異文化適応～ラオスでの母子保健プロジェクトで学んだこと～」のテーマで椋プロジェクトマネージャーが講演
- 11月7日 ISAPH事務局磯が東京女子医科大学で講義



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH 東京事務所

〒105-0004

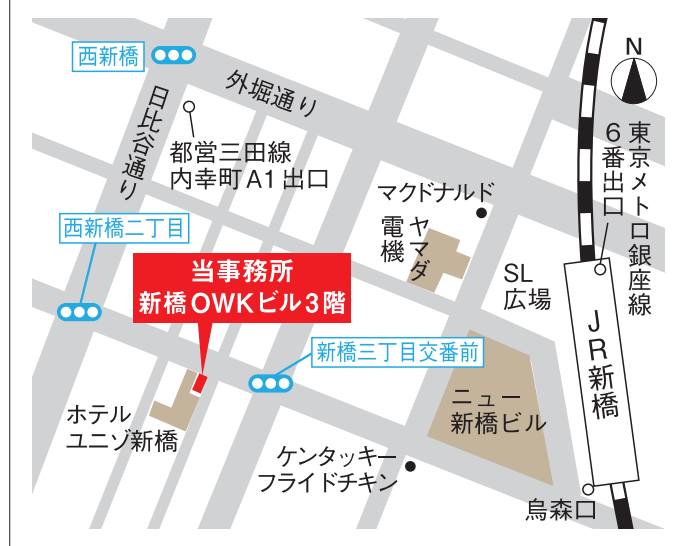
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

東京事務所案内図



【ISAPHニュースレター 第14号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	湯川 武	早稲田大学イスラム地域研究機構 招聘研究員
理 事	樋口 敬記	梓設計九州支社特別顧問
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院
監 事	竹之下 義弘	弁護士(東京六本木法律特許事務所)

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院Ver.5.0)

- 総合周産期母子医療センター (NICU・MFICU)
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。